

〔M-203〕 FOOTPRINTS

PAUL McCARTNEY: RECORDING SESSIONS (1969-2013) によると、ステュワートが発した *It's beautiful outside.* という言葉にマッカートニーが飛び付いたのが、歌の始まりだった。ステュワートはマッカートニーの自宅録音スタジオに着いたところで、外は雪景色。当初は、餌を探すカササギが主人公だったが、それでは野生動物のドキュメンタリーのようにになってしまう。そこで、マッカートニーが孤独な老人を登場させた。過去に〔Eleanor Rigby〕、〔Another Day〕、〔Treat Her Gently – Lonely Old People〕を書いていることを考えると、何の不思議もない。

歌詞は読みやすい文章で書かれているが、注意すべき点がある。*His friends have flown away.* は「友達はみな居なくなった」ということ。CD 付属の対訳が言うように『逃げ出し』たかどうかは分からない。他界したか、単に転居しただけのことかも知れない。孤独になった理由を明確にしていないのが、原文の良さなのだ。なお、(out) in the cold には「寒い所で」と「ただ独りで」の、両方の意味がある。

非制限用法(継続用法)の関係副詞を介して *in the snow* に続く *where footprints never go* にも、複数の意味が被っている。一つは、「雪面に付いた足跡がなかなか溶けない ⇒ 冬が長い」。さらなる降雪が足跡を消すであろうことは、考えないでおく。もう一つは、「この老人の追憶が消えることがない」。さらに、可能性として、「この老人の職歴が続いている」という解釈もできるだろう。

だが、*Oh, white blanket* 以降から、最も重要な意味は、愛する女が居た過去への追憶であることが判明する。この女が彼を捨てたのか、単に移転したのか、それとも先立ったのかは、不明。いずれにしても、彼がこの土地を離れないのは、いつか彼女が戻ってくるかも知れないという思いがあるからだ。

この部分の繰返しを聴くと、彼女が死去したのではないと推測できる。*Oh, white blanket hiding the traces of paths he didn't take.* と *Oh, white blanket covers the memory of moves he didn't make.* から読み取れるのは、彼が進路を誤ったこと、適切な手段を取らなかったこと。実情はリスナーの想像に委ねられている。私に思い付くのは、彼が(彼女と一緒に)町へ出て就職しなかったこと、彼女に明確に求愛しなかったことである。

米国で PRESS TO PLAY がリリースされた 1 週間後の 1986 年 8 月末、同じく米国で映画 SHANGHAI SURPRISE（邦題“上海サプライズ”）が封切られた。ジョージ・ハリソンの HandMade Films 社が制作した冒険コメディで、音楽担当はハリソン。彼はこの映画用に 5 曲を書いた。しかし、映画が不評だったためなのか、サウンドトラック盤は制作されなかった。結局、2 曲（H-112, H-114）は翌年に発表されたアルバム CLOUD NINE に収録され、1 曲（H-104）は、そのアルバムからカットされたシングルの第 2 面に採用され、残りの 2 曲（H-102, H-103）は別の形で音盤化された

〔H-102〕 SHANGHAI SURPRISE

同名映画の主題歌で、映画冒頭のクレジット・タイトルのバックで流れた。2004 年版 CLOUD NINE の追加曲の一つとして聴くことができる。なお、劇中における Shanghai Surprise とは、中国のギャングが考案した手製の爆弾のこと。

ハリソンが、既に決まっていた題名で書いた歌なのだが、それにしても素晴らしい。1938 年の上海の情景描写を含め、映画のプロットにも沿い、男女の感情を中心に置き、肝心の *Shanghai Surprise* を「上海の贈り物／上海での思いがけない出会い」と読ませている。そして、この歌には、男が歌うパートと女が歌うパートがある。歌うのは、ハリソン自身とヴィッキ・ブラウン（Vicki Brown）。映画の主演カップルだったショーン・ペン（Sean Penn）とマドナ（Madonna）でなくて良かったというのが、ハリソン・ファンの思いだろう。

歌詞の 1 番。TOCP-67739 付属の解説書（対訳 UNICUL）にある『I was knocked down on my back 背後から襲われたんだ』は間違い。正しくは、I was knocked on my back（打ちのめされた）。運賃を払う金が残っていないため、客船に乗るためのボートから追い出されたのだ。

ところで、*on a liner* と *see China* の押韻を聞いて、LET IT BE... NAKED のおまけ曲の一つを思い出したビートルズ・ファンが、少なからずいたかも知れない。リンゴ・スターが書いた〔Taking A Trip To Carolina〕のことだ。*on an ocean liner* と *to Carolina* での押韻があった。

〔H-110〕 **WHEN WE WAS FAB**

この歌について、ハリソンは When We Was Fab was written as a joke, a little bit of fun. と語った。確かに冗談っぽく書いてある。しかし、内容は真実だ。面白いので、詳しく丁寧に読んで行こう。

タイトル。fab は、形容詞 fabulous を縮めた略式の言葉で、wonderful (素晴らしい) の同義語である。そしてこの歌に使われているのは、The Beatles の代名詞が the Fab Four だったことによる。私が聞いたところによると、このニックネームを考案したのは、トウニ・バロウ (Tony Barrow)。1962 年、売り出し中のビートルズの広報担当者として、ブライアン・エプスタインがデッカ・レコードから高給で引き抜いた人物である。

なお、be 動詞の一人称複数の過去形を were としていないのは、冗談の度合を増すためとも、we を全体として見るのではなく、each one of us という個々として捉えるためとも考えられる。そうであれば、*In my world, you are my only love.* などにおける you が、ハリソン以外のビートル個人それぞれを指す可能性があることになり、一層のこと興味深い歌詞になる。同様の例として、ポール・マッカートニーが 1970 年に発表した〔Man We Was Lonely〕がある。

1 番。when grass was green (芝が青かった頃) は、「若かった・未熟だった」という意味。woke up in a daze (目が覚めて呆然とした) は、気付いたら、あっという間にスターダムに登っていたことを言っている。これに続く *Arrived like strangers in the night* (夜に着いた時は、人に知られていない新来者だった) で述べているように、ちょっと前まで無名だったのだ。ところで、このライン、当時、ヒットパレードを熱心に聴いていた人の耳には留まらず。〔Strangers In The Night〕は、フランク・シナトラによる 1966 年のヒット曲。〔Paperback Writer〕の少し前に全米 1 位だった。

when income tax was all we had に関しては、“ビートルズ英語読解ガイド”の〔Taxman〕の項で説明した。

2 番。CD 付属書には、『愛撫の手』とか『愛をかわした』とか、とんでもない対訳が載っている。実際にハリソンが語っているのは、ビートルズの成功に群がった

1988 年 8 月 2 日、ポール・マッカートニーが、既に 3 年前に閉校になっていた Liverpool Institute High School for Boys を訪ねた。マッカートニー兄弟、ジョージ・ハリソン、ビートルズ裏方のニール・アスピノール等が通った中高一貫校である。その際、講堂で、自身のギターだけを伴奏にしたソロ演奏が撮影された。曲目は〔In Liverpool〕。このビデオは 2005 年に発売された DVD 版 PAUL McCARTNEY'S LIVERPOOL ORATORIO の付録になった。

〔M-214〕 IN LIVERPOOL

マッカートニーがリヴァプールについて歌った曲としては、〔Penny Lane〕が名高い。ロンドンへ移ってから 3 年ちょっと経った 1967 年初頭の録音で、通りで見かけた光景のいくつかを描写する歌詞になっていた。

〔In Liverpool〕も基本的に変わらない。だが、〔Penny Lane〕の理髪師、銀行家、子供たち、消防士、看護婦のような服装をした女性と違って、登場人物の無邪気さは描かれていない。逆に、みな悲哀がある。

1 番は、私が聴き取った音を、私の読みとスタイルに従って書くと、次のようになる： (I) spent my early life in Liverpool, something I'm not likely to forget. People blend with places, and faces that I know but never met. / Upstairs on the bus, there sits a man. He's talking to himself, or so it seems, listing names of old comedians and laughing at them. / Down the pierhead where the speakers meet, each of them, his own imagined crowd, giving us his version of the book God has written.

背景にあるのは、街並みと調和する人たちの顔。よく見かける顔であっても、マッカートニーの知合いではない。

真っ先に出てくるのが 2 階建てバスに関する思い出。決して意外でない。〔A Day In The Life〕のミドルには (I) made the bus in seconds flat. (I) found my way upstairs and had a smoke. (© 1967 Sony / ATV Music Publishing LLC) というくだりがあった。

THE BEATLES LIVE AT THE BBC のトラック 3 も思い出される。ビートルズでいることによって不可能になった日常のことを尋ねられると、マッカートニーが即座に Like riding a bus. (例えば、バスに乗ること) と答えたのだった。

ビートルズ・ソロ作品読解ガイド(4) 内容見本 著作権保護コンテンツ

つまるところ、この録音はデモ以下で、メモのようなものに過ぎない。歌詞が推敲されていないし、〔Isolation〕に似たミドルエイトもぶざまだ。さらに述べると、タイトルとされている *real love* という語句は、歌詞の中にはない。あるのは *real life* と *some love* だけである。

レノンがギターの弾き語りで録音した〔*Real Love*〕は、ほかにもある。これは2004年9月下旬に発売されたアルバム *ACOUSTIC* で世に出た。

歌詞は、基本的に、前の録音と同じ。ただし、1番と2番とが入れ替わっているほか、3番で終わらず、ブリッジ2回目～新1番～新2番～ブリッジ3回目と続く。そしてブリッジ2回目では、*Why must they be alone?* が *Why must we be alone?* に替わっているように聞こえる。いずれにしても、未完成のままと言わざるをえない。

曲の構成と歌詞が完成しているのは、レノンが *Take 4* と呼んだデモ。1998年11月初旬に発売されたボックスセット *JOHN LENNON ANTHOLOGY*、ならびに2005年10月上旬発売の2枚組ベスト盤 *WORKING CLASS HERO* で、聴くことができる。1980年(6月?)の録音で、伴奏にピアノを使用。ぶざまだったミドルエイトを削ったことによって、すっきりした印象を受ける。

歌詞だが、1番は *All my little plans and schemes, gone like some forgotten dreams. (It) seems like all I really was doing was waiting for you.*。一人称で語り始めるのが、レノンらしい。寂しさが表現されているものの、虚無的な感じはしない。そして二人称が登場する。この *you* は、以前のデモと違って、レノン自身ではありえないし、リスナーのこととも考えられない。紛れもなく、レノンにとっての愛の対象である。

2番。 *Just like little girls and boys, playing with their little toys. (It) seems like all we really were doing was waiting for love.* で、*we* が出てくる。数式のように書くと、一人称単数+二人称単数=一人称複数 になった。素晴らしい。

同じく 1988 年 10 月中旬、シングル盤〔Handle With Care〕が発売された。演奏者は、ウィルベリー家の 4 人兄弟と親戚 1 名で構成するバンド The Traveling Wilburys (トラヴェリング・ウィルベリーズ) と名乗っていたが、実体は、ジョージ・ハリソン、ジェフ・リン (Jeff Lynne)、ボブ・ディラン (Bob Dylan)、ロイ・オービソン (Roy Orbison)、トム・ペティ (Tom Petty) の共演だった。仮名を使用したのは、それぞれのレコード会社との契約により、実名を出すことができなかったからのである。加えて、スリーブの写真では、5 人ともサングラスをかけていた。とは言え、声と風貌から、正体は明かだった。

バンドの結成は、1988 年 4 月、ハリソンが急いで 1 曲を録音する必要に迫られたことによる。彼が 2 年後にオランダの音楽 TV 番組 COUNTDOWN で語ったことの要点は以下のような。レコード会社がヨーロッパ向けに〔This Is Love〕の 12 インチ・シングル盤を出すことを企画。それには、B 面に使う未発表曲が必要。そこで、友人たちの手を借りて〔Handle With Care〕を録音したのだが、出来が良すぎたため、A 面にすることになったというわけ。結局、1988 年 6 月に発売された 12 インチ盤 B 面の 2 曲目には、〔All Those Years Ago〕が再使用された。B 面の 1 曲目は、前月に米国で発売された 7 インチの B 面と同じく、〔Breath Away From Heaven〕だった。

〔Handle With Care〕を B 面にしないと決めたハリソンは、1988 年 5 月、ウィルベリーズを召集。各自が持ち寄ったねたを基に、多くの楽曲が録音された。その結果、5 カ月後、シングル〔Handle With Care〕／〔Margarita〕と同時に、アルバム TRAVELING WILBURYS VOL. 1 が世に出た。

収録された 10 曲の作者は、どれもトラヴェリング・ウィルベリーズとクレジットされていたが、次の 3 曲は主にハリソンの手によると察せられる。リード・ヴォーカルが彼ということだけでなく、彼の音楽出版社の管理下に置かれたからだ。

〔M-221〕 PUT IT THERE

Let it be. はマッカートニーの母の言葉だったが、今度は父の出番。ドキュメンタリー PUT IT THERE の中でマッカートニーは、私の耳によると、次のように語っている: based on some of my dad used to say when we were kids. They gotta be Liverpool silly things to say all the time, and he used to say “Put it there if it weighs a ton” (僕たち兄弟が子供の頃、父がよく言っていたことが基になっているんだ。リヴァプールでしょっちゅう使われていた、おかしい言い回しなんだろうけど、父もよく Put it there if it weighs a ton と言っていたよ)。Liverpool silly というのは、if it weighs a ton (凄く重いとしても) という語句を Put it there (そこに置いてくれ/座ってくれ) に付け加えていること。リヴァプールでなくとも、単に Put it there. と言えば、「握手しよう・仲良くしよう」の意味になる。

〔Put It There〕のプロモビデオも見直してみよう。写っているのは、学童期の男子とその父親が、自転車修理や日曜大工を一緒に行ったりするシーンや、トランペット演奏や水泳などのスポーツに挑戦する息子を励ます父親の姿。親子の絆である。これこそ、*That's what a father said to his young son.* というラインを含む、歌詞繰返し部の実体描写であろう。となると、*Put it there if it weighs a ton.* は「仲良くしよう」、*I don't care if it weighs a ton.* は「ともかく」という意味と解することになる。アルバム FLOWERS IN THE DIRT の1993年版(TOCP-7866)に付属するライナーノーツ(ビートルズ・シネ・クラブ 北野知行 著)ならびに歌詞翻訳(富永正隆対訳)、そして1996年版(TOCP-8205)の歌詞翻訳(山本安見訳)における『1 トンもあるなら放っておけばいい』、『1 トンもありそうな難問でも ひとまず横に置いときな』、『1 トンもあるのなら 放っておけばいい』というような和訳は、たとえ誤訳とは言い切れないとしても、リスナーを混乱させるだけの逐語訳としか考えられない。

しかも、TOCP-7866 ときたら、1 番末尾の *it's all that matters in the end* を『結局は どうでもいい事ばかりだ』としている。マッカートニーがリスナーに誤解されるような誤訳はしないで欲しい。このラインは *You'll understand* の目的格で、その意味は「友人であることこそが、最終的に重要」である。

英語の表記についても触れておく。『all it's mixed emotions』は誤りで、正しく

〔M-223〕 THIS ONE

TOCP-7866 の対訳は、またしても酷い。まず、1 番の *Did I ever take you in my arms, look you in the eye, tell you that I do?* だが、この代動詞 *do* は、ここでは『そうしたい』という意味ではない。言外だが、*love you* (君を愛している) という意味である。

そして繰返し部前半の *if I never did it* は、『そんなこと一度もなかった』という断定ではない。「そうしたことがなかったとしたら」という想像である。話者自身は不確かで、したかも知れないという思いがあるので、仮定法ではなく、単なる直説法の条件文になっているのだ。しなかった場合の説明が、やはり直説法過去時制の *There never could be a better moment than this one.* (それは、今ほど良い機会がなかったからだよ) である。

繰返し部の後半に、マッカートニーが得意とする言葉遊びが登場する。*this one* が *this swan* に変わるのだ。この二つの言葉はほぼ同じように発音される。*one* の発音は、本来は [wan] なのだが、最近の英国では [wɒn] または [wɔn] と発音する人が増えているらしい。ということで、*this one* は、マッカートニーの歌唱のように、[ðɪswɒn] である。他方、*this swan* も、普通で速度で発音すると、[ðɪswɒn] または [ðɪswɔn] になる。[s] と [s] が連続する場合、前の [s] が脱落するからだ (“ビートルズ英語発音ガイド” 第3章 ⑤ 参照)。

マッカートニーがこの変化をどのように正当化するのか、彼自身による簡潔な説明をビデオ THE McCARTNEY YEARS の中で聞くことができる: The original image that had come into my mind had been rather sort of Indian, sort of religious idea. Sort of a swan flying over a sort of lotus leaf and everything. (僕が抱いたイメージは、インドのヒンズー教の絵にあるような、(神を乗せた)ハクチョウがハスの上を滑空している光景)。

なるほど。プロモ映像にもシングル盤のカバーにも、それが表われている。だが、私には *Fade this one to black* が読めない。主語は、直前の *How calm the water, and bright the rainbow!* と同じ二つの名詞であろう。しかし、「水の静けさと虹の輝きのために、今という時が色あせてしまう」とは、どういうことなのか? 今とい

映画関連のレコードやライブ盤は別として、リンゴ・スター自身のスタジオ録音アルバムの最後は、1983年6月発表の OLD WAVE のままだった。その状況でリリースされたのが TIME TAKES TIME 。1992年5月中旬のことだった。

Time takes time （時間は時間を掛ける／時間には時間が掛かる）とは、なんとも面白い表現だ。「時間というのは掛かるもの」という意味なのだろう。その深意は、私の推測だが、OLD WAVE から9年も経った言い訳ではなからうか？「随分と時間が経ったが、成果を出すには時間が掛かる」というような。

ともかく、最初はスターの口から出たと言われている A hard days's night （きつい一日の夜）と Tomorrow never knows （明日が知ることはない ⇒ 明日のことは分からない）を思い出す。

アルバム TIME TAKES TIME に先行する形で、1992年4月下旬、シングル盤〔Weight Of The World〕／〔After All These Years〕が発売された。CD版には、〔Don't Be Cruel〕というボーナスがあった。

〔S-035〕 AFTER ALL THESE YEARS

スターとジョニー・ウォーマン（Johnny Warman）との共作。

歌詞は、ロック・バンドの一員として世界を旅する話者の半生を、手短かに振り返るもの。スターの頭に頻繁に浮かぶ思いであろう。BVCP-202 付属リーフレットの記載（Kuni Takeuchi 対訳）を参照しながら、読んでみよう。

出だしの *We didn't have the time to think things over.* は、『僕らは思い返すこともなかった』という意味とは思えない。私は、「僕たちは物事を深く考えたりしなかった」だと考える。その理由は、後続のライン *We had a lot of fun* で言及されている。若く、愉快なことの追求に夢中だったからだ。

Stepping out of loneliness, now the road don't seem so long after all these years. は解し難い。多分、「独りじゃなくて仲間が居れば、遠征も長くは感じない。今ではそう思う」というような心境を表しているのではないだろうか。ともかく、

1992 年 10 月上旬、英国で THE BUNBURY TAILS と題したアルバム／ビデオが、CD／AC／VC の 3 フォーマットで発売された。ビデオは、同年に放映された同名の年少者向け TV 動画シリーズの 12 エピソードを収録したもので、アルバムはそのサウンドトラック盤。全部で 12 曲。その中の一つがジョージ・ハリソンの作品だった。

〔H-128〕 **RIDE RAJBUN**

“Rajbun’s Story”（ビデオの 6 エピソード目）のバックで流れた歌で、アルバム THE BUNBURY TAILS の 5 曲目となった。ジョージ・ハリソンが作曲。歌詞は、ハリソンと THE BUNBURY TAILS の共同創作者デイヴィッド・イングリッシュ（David English）との共作。歌唱はハリソンと息子ダーニ（Dhani）。1988 年 3 月の録音のようなので、当時は未だ 9 歳だったことになる。前奏のシタール奏者はラヴィ・シャンカル（Ravi Shankar）。

Rajbun とは、インド出身のウサギのキャラクターの名。Bunbury という町を本拠地とするクリケット・チーム The Bunburys に属している。それで、〔teil〕と発音する語が tale（話）ではなくて tail（打順の最後）なのだ。

歌詞に耳を傾けよう。まず主要部だが、最初のラインは Ride, Rajbun. Ride, Rajbun。何に乗って進むのかは、少し後で分かる。

その次のラインにはバリエーションがある。1 番と 2 番では Seek your fame and speak your fortune。3 番になると動詞が入れ替わり、Speak your fame and seek your fortune。そして 6 番では Seek your fame and seek your fortune へ変わる。他方、4 番と 5 番では Cross the deserts, through the forests という、まったく別の語句になっている。この *cross* は、動詞ではなくて、前置詞かも知れない。

ライン 3 は、1 番、2 番、3 番、6 番では Go on, Rajbun. Ride your Raleigh。Raleigh は、英国の自転車ブランド。次の行末の *the valley* と押韻する。4 番と 5 番では、ライン 1 と同じく、Ride, Rajbun. Ride, Rajbun。

〔M-247〕 OFF THE GROUND

アルバム OFF THE GROUND は、そのタイトルが由来するナンバーで始まる。*off the ground* は、そもそも、「飛行中で」という状況を表す副詞句。ちなみに、ビデオ集 WINGSPAN で見ることができるプロモ映像では、マッカートニーが、TV のスーパーマンのように（ただし、両腕を真横に延ばして）空を飛び回る（fly around）。転じて、「進行中で」という状況を表すこともある。そこで、各番末尾の *(It) doesn't / wouldn't take a lot to get off the ground.* にあるように、get と組み合わせると、「飛び立つ」とか「始める」という意味になる。前向きな姿勢が表わされる語句だ。

1 番。消沈している人に対して、話者が *There must have been a lot of heartache for you to sink so low.* と思ひ量る。続く *You must have had a ton of pressure.* は「随分と苦悩したんだろうね」。TOCP-7580 付属のリーフレットにある『あふれるほどの情熱に輝いていた君なのに』という和訳は、『対訳』から逸脱している。この pressure は「プレッシャー」とは限らない。

『答えが欲しい もしそれがノーなら』も、適切な翻訳ではない。*Only answer if the answer's no.* は、「僕がいま言ったこと、違ってないよね」という意味。話者は無理に返答を求めているわけではない。自分の推測が当たっていることが分かっている、あえて相手が「そうです」と苦悩を認める必要がないようにしていると思われる。相手に対する思い遣りだ。

ブリッジの *I need loving. You need loving, too.* には、異性へのロマンティックな誘いが強く感じられる。

2 番冒頭の *There must have been a lot of magic when the world was born.* と聞いて、私が連想した言い回しがある。それは人間関係などについて言う *The chemistry is right.*（化学反応が良い ⇒ 相性が良い）。このラインは、話者たちの出会いから何かが始まるかも知れないことに言及しているようだ。

だからと言って、*Let me be the one you wish for — (the) one you call for when you're all alone.* の前半を『僕は君の望む男になりたい』と訳すのは、ただけない。誤訳であるばかりか、それでは、この歌が男女関係についてであること以外の余地がなくなってしまう。より広い意味での愛情、慈しみ、優しさ、友情などを想像するリスナーもいるだろうに。私がこの文を意識すると、「君がひとりぼっちの時、そばに居て欲しいと思うような人。僕はそんな存在になりたい」となる。